

天誅組が見た風景

阪本基義

「近世・近代の思想研究会」基調報告より
会場…東吉野村役場 時…2019年8月19日

#1

私はこの東吉野村に生まれまして、高知大学に学びました。高知(土佐)は幕末の志士がたくさん出ました。大学時代に坂本龍馬や武市半平太や中岡慎太郎の志士と出会ったのが私と天誅組との出逢いのキッカケです。卒業後、郷里に帰り教師をさせていただき、32年間東吉野村で勤務しました。東吉野村では15人の幕末の志士(天誅組志士)が亡くなっています。お墓も二カ所にありますし、その他関連史跡もあります。私は、地元の教員として子供たちに、また、東吉野村から天誅組、幕末・明治維新を発信しようということ、何かと取り組みを進めてきたわけです。定年を迎え教員生活も終わり、教育長を拝命しまして、8年間勤めさせていただきました。その関係でも天誅組に関わりを持たせていただきました。研究というほどでもないんですが、今も天誅組に関わらせていただいています。

お手元の『草莽ノ記』という著書、これは平成15年、ちょうど私が教員を辞める年にまとめたものです。学術的にはあまり参考にならないと思いますが、子供たちの励みになればと思って書かせていただきました。

それでは、プレゼンテーションに移らせていただきます。先生方もおそらく行かれたところもあるかと思いますが、京都から東吉野村までを中心に、史跡などのご紹介も交えながら進めさせていただきますと思います。

#2

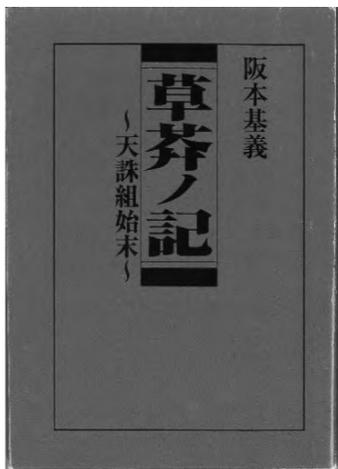
幕末の様子について、1853年のペリー来航あたりから明治維新までの約15年間をまとめて紹介します。だいたい、幕末など社会が激変する時期は、いつの時代もそうでしょうが、大きなポイントとしては社会不安が増大しているということがまず一つ。その中には飢饉(天保の大飢饉)もありますし、地震災害(安政東海大地震)もたくさん起こっています。それから、江戸の大火といわれる火災でたくさんの人たちが亡くなっています。また、安政5年(1858)、安政の大獄や安政の改革の頃ですが、コレラが流行してたくさんの方が亡くなっています。そういった社会不安が発生していたということです。

次に、ご承知の通り、欧米から開国の要求が日本に突きつけられてきました。アメリカだけではなくロシア、イギリス、フランスなどが日本の近海にあらわれて、開国を迫っていたという事情がありました。特に、1840年のアヘン戦争は、日本も植民地にされてしまうかもしれないという危機感をもたらし、日本にもいろんな影響を与えたのではないかと思います。高杉晋作もアヘン戦争のあと、清国に密出国して見聞しています。

3つ目ですが、非常に学問が盛んでした。私がこれまでに読んだ書物の中で、特に陽明学「行うことと知ること」は一致してはならない(知行合一・致良知の説)という学問が盛んになって、それが全国的に広まっています。スタートは江戸だと思えますが、江戸で学んだ生徒が全国へ散って

郷里でこれを伝えました。その中には水戸学もあります。それらを教えたのが藩校、郷校、私塾です。有名なのは松下村塾や緒方洪庵の適塾があります。庶民は寺子屋で読み書きそろばんを学ぶということで、日本全体が非常に知的なレベルが高まっていた時代でもあったと思われれます。

それから4つ目ですが、幕府の力が弱まってきました。どこの国もそうだろうと思いますが、社会変革の前には時の権力は弱っていきます。そういう中で天保の改革が行われますが、やはり役人が硬直しているとうまくいかないもので、結局失敗して弱体化していく。安政の改革でも失敗するなど、大きな二つの改革が失敗に終わりました。さらに、將軍の跡継ぎ問題で江戸幕府が大きく分かれていきます。紀州藩主の徳川慶福を推す南紀派と一橋慶喜を推す一橋派が対立する。一橋慶喜を擁立しようとしたのは、実父である徳川斉昭(前水戸藩主)を筆頭に、徳川慶篤(水戸藩主、実兄)、松平慶永(越前藩主)、島津斉彬(薩摩藩主)らです。一方、南紀派は譜代大名が中心となります。そして安政5年(1858)、第13代將軍家定が重態になると、南紀派(譜代大名)は彦根藩主井伊直弼を大老に就任させ、家定の命で慶福を第14代將軍家茂にしました。そして井伊直弼による安政の大獄が始まりました。いろいろな本を読みますと、100人以上が弾圧されて、天皇に近い公家や大名、そういった人たちまでも処罰されました。その結果、幕府自ら力を弱めていくということになったのではないかと思います。その中で尊王攘夷運動、特に水戸斉昭を中心にした尊皇思想、それに孝明天皇はどちらかという外国嫌いというようなこともあり、尊王と攘夷が合わさって「尊王攘夷」、倒幕の1つのスローガンのようなものになっていったのではないかと思います。



草莽ノ記
奈良県東吉野村

天誅組のリーダーとして担ぎ上げられましたのが中山忠光です。当時19歳。今は下関の中山神社に祀られています。曾孫の浩は、昭和12年（1937）、満州国皇帝溥儀の弟溥傑と結婚しました。

幹部としては3人の総裁がいました。一人目は吉村寅太郎。土佐の人で、今の愛媛県との境目の梶原町というところで庄屋をしていました。奈良県でいいますと野迫川村や十津川村の庄屋といったところです。二人目、松本奎堂は三河・刈谷藩士で、刈谷藩の中樞にあたる上級の武士です。それから藤本鉄石は岡山藩の下級藩士ですが、元は片山という姓で、藤本家に養子に行きました。鉄石は黒住教とつながりが深く、黒住教を布教するために天誅組と関わりなく、もっと早い段階に脱藩をして京都の方で活動をしていたそうです。鉄石は万葉集や古事記・日本書紀に精通、それに書画、文学にも長けており、一時期、京都の伏見で私塾を開いて学問と武芸を教授していたこともありました。



中山忠光肖像
下関市立歴史博物館所蔵

そうした3人の総裁が中山忠光を担いで、天誅組の旗揚げをしたのです。そして、この3人が東吉野村で眠っていました、私たちは東吉野村を「天誅組終焉の地」とよんでいます。

天誅組から離れて、一時行方知れずになりました。岩倉具視との繋がりが非常に強かったようで、明治になって徳島裁判所長や三重県大書記官、衆議院議員、東京株式取引所理事などを歴任しました。石田英吉と天誅組を通して非常に懇意にしていたということで、今の早明浦ダム近くの寒川鉦山を開発しました。それから、東京歌舞伎座の社長もつとめました。坂木なつ子という娘がいましたが、父の死後、父の遺産をそのまま刈谷の一番中心校である亀城小学校に、子女の教育のための奨学金を寄付したということで、ふるさとのために親子でがんばっています。おそらく軍閥の批判もあつたか、士族会での評判は芳しくありません。

5

それからいよいよ文久年間です。いろんな組織が全国的に作られています。土佐では、土佐勤王党が文久元年（1861）8月に結成されます。この盟主（首班）が武市半平太（瑞山）です。武市半平太も土佐では下級武士に近い人物です。それから、九州でも肥後勤王党。それから久留米天保学連。これは神官真木和泉が盟主です。それから肥前にも天保学連が組織されるなど、尊王攘夷というよりも幕府に対する反対勢力がどんどん大きくなっていきました。

さらに10月には松本奎堂、松林飯山、岡鹿門の3人が『雙松岡塾』という漢学塾を大坂（現在の大阪市福島区中之島）にある大阪地方検察庁の付近に開設します。なお、松林飯山は大村藩士で、岡鹿門は仙台藩士です。この3人が協力して大坂で雙松岡塾を開いて尊王攘夷を鼓舞しました。現地に史跡の碑などが残っています。

吉村寅太郎が脱藩をいたします。文久2年（1862）1月にも脱藩して

那須信吾、彼も土佐の人間です。元は医者ですが、身長が180センチメートルの大男で、槍も大変強かったそうです。それから、池内蔵太、坂本龍馬の亀山社中で船を操作して鹿児島へ向かう途中、五島列島の沖で時化に遭って遭難死しています。前田繁馬も土佐の人で、寅太郎と同じ村（今の梶原町）出身ですが、桜井市朝倉で津の藤堂藩に殺害されました。宍戸弥四郎は三河・刈谷の出身で、東吉野村で眠っています。それから、伴林光平は藤井寺の尊光寺で生まれました。和歌の達人でして、奈良奉行所にも伴林光平の弟子がたくさんいました。斑鳩から京都へ向かう途中、生駒の北田原で捕らえられて、奈良奉行所で『南山踏雲録』という、自分の天誅組の足跡を思い出して書いた記録があります。光平は、その後京都に送られて翌年2月16日、六角の獄舎で処刑されました。享年52歳で天誅組では一番の年長にあたります。

私の知る限りでは、生き残った志士が4人います。一人は石田英吉。土佐の人で、東吉野を脱出して生き残って、その後、禁門の変にも参加し敗れて長州に戻り、そして坂本龍馬の海援隊に参加し、その後戊辰戦争にも参加して明治維新後は高知県知事などを歴任しました。彼は医者の子で緒方洪庵の適塾でも学んでいた人物です。それから、北畠治房。元は平岡嶋平というのが天誅組の変の時の名前でしたが、明治になって北畠治房に改名しました。それから、水郡長義。河内の富田林の出身ですが、13歳で父（水郡善之祐と天誅組の変に従軍して、あまりにも若かったので赦されて帰郷、（※父善之祐は刑死）、明治維新後アメリカに留学して、特に北畠あたりが支援をした人物です。この石田、北畠、水郡、この3人は天誅組の三十三回忌や五十回忌に東吉野を訪ねたという古文書も東吉野村に残っています。最後に、伊藤謙吉。彼は、三河・刈谷藩を脱藩した人物ですが、高取城を攻めたときに

帰ってきて、「諸藩は動くよ」ということで武市半平太にも脱藩を勧めて「土佐も動くわけではないか」と誘いをかけるわけですが、土佐藩全体を勤王にして動くという意思が強い半平太は、加わりませんでした。その後、3月に、彼は宮地宜蔵という津野山郷（津野町）の人と一緒に長州へ脱藩をします。その別れの夜に歌った歌が残されていて、佐川町立青山文庫に所蔵されています。この青山文庫は、田中光頭という明治時代の宮内大臣が生まれたところ。田中光頭が集めたものなどを収蔵しています。光頭の雅号が青山で、青山文庫という名称はそれに因ります。

6

文久2年（1862）になると、京都で天誅という暗殺が増えます。その中で特に大きな動きが2つあります。

1つの動きとしては公武合体。皇妹和宮が將軍家茂とご結婚をなさり、両者が一緒になってこの日本の窮状をなんとかしようという努力をしたにもかかわらず、倒幕に向けた動きがますます盛んになります。逆に天誅組の方から見れば、公武合体派の暗殺が増えていくことになります。9月から10月にかけて攘夷の勅使が派遣されます。京都から江戸に向かって派遣されていくわけですが、その中で特に武市半平太も偽名（柳川左門）を使って駕籠に乗って江戸城に入り、將軍が下座、勅使が上座になって攘夷を迫ったという出来事があります。このときに初めて、朝廷側が幕府と逆転したことになるかと思えます。そして、11月に「攘夷の勅書」を將軍家茂に授けるといふことが起こります。このあたりからどんどんと朝廷、反幕勢力が力を増していきます。一方、京都守護職に松平容保が就任し、京都が政治の一番中心になっていくわけ。吉村寅太郎が隠れ住んだ木屋町には坂本龍馬の

隠れ家（寓居）もありました。武市半平太はこの寅太郎の寓居の隣にいました。佐久間象山が襲われたのも、この木屋町通りです。

それから文久3年（1863）。幕府が攘夷を宣言して、5月10日に攘夷活動に本格的に取り組むことになっていたのですが、その約束を違えてしまいません。それまでに、將軍家茂も京都に来て、天皇に供奉して攘夷を祈願したこともあり。5月10日に長州藩が幕命に従ったとして攘夷を執行し、アメリカの艦隊に砲撃を行いました（いわゆる下関事件）。これが初めての具体的な攘夷活動です。また、西本願寺の別邸で武市半平太や桂小五郎、それから久留米の真木和泉や井上聞多などが1月と6月に2回会合（翠紅館会議）し、朝廷に建白（献策五事）をしています。さらに7月には薩英戦争が起こりました。

#7

そうした中で、文久3年（1863）8月13日に、孝明天皇が大和へ攘夷祈願に向かう勅が出されます。大和では神武天皇陵や春日大社などにお詣りをします。これが有名な天皇の「大和行幸の詔」といわれるものです。攘夷祈願のため、大和行幸、神武帝山陵、それから春日大社などにお詣りをして、親征（直接天皇が幕府を倒す戦争）をするのかどうかという軍議をします。その当時は長州藩の軍事顧問を久留米の真木和泉がしていたといわれています。そして、天誅組は8月14日から行動を始めたのです。

大和行幸の御先鋒といえますか露払いで、集結したのは京都の方広寺の境内。豊国神社のあたりです、今の京都国立博物館もその境内の中の一 corner だそうですが、そこに39人の諸国脱藩の尊王攘夷の浪士が集まって出発しました。土佐からは17人（18人という説もあります）。それから、真木和泉の息

あります。天誅組はこの観心寺で戦勝祈願をしました。後醍醐天皇のために最も尽力した楠木正成が祀られているこの場所に立って戦勝を祈願したのです。そして、河内長野から千早峠を越えて五條に入り、五條代官所を襲う前に岡八幡宮という神社に集結しました。そして五條の代官所を襲撃し、代官鈴木源内以下6人を討ち取り、近くの桜井寺を本陣として「五條御政府」を宣言しました。これが8月17日のことです。ちなみに、五條代官所は現在の五條市役所にありました。

ところが、翌8月18日の深夜に京都で反対派（公武合体派）によるクーデター『八月十八日の政変』が起こります。京都で反対派が宮中を支配すると、それまで御所を守っていた尊王攘夷派の長州藩が追放され、7人の急進派の公家が長州へ落ち延びて行くことになりました。

#9

それで大和行幸も中止になりました。天誅組の挙兵の大義が失われていき、そのわずか3日後の8月21日、天誅組は本陣を十津川の入口の天の辻峠という海拔800メートルくらいのところに移して、十津川郷士を頼ったというわけです。

その途中の五條市西吉野町に、国指定重要文化財「堀家住宅」賀名生皇居があります。かつて後醍醐天皇が一週ほど行宮を結んだところです。その冠木門に掲げられた「皇居」と書かれた扁額は、吉村寅太郎の書といわれています。ついでこの間、こちらの「堀家住宅」から日本で一番古い日の丸が出てきたとされています。テレビや新聞などでも報道されました。後醍醐天皇から下賜された日の丸と伝わっているようですが、科学調査により室町時代、15世紀頃の日の丸だとされています。

のかかった人物だと思われませんが、久留米から8人、それから刈谷藩からは東吉野で戦死した松本奎堂、宍戸弥四郎、そして伊藤三弥という3人の藩士が加わっています。年齢別では30代が8人、20代が29人、10代が2人。その2人は、先ほどの水郡長義（英太郎）と、土佐の島村省吾19歳です。

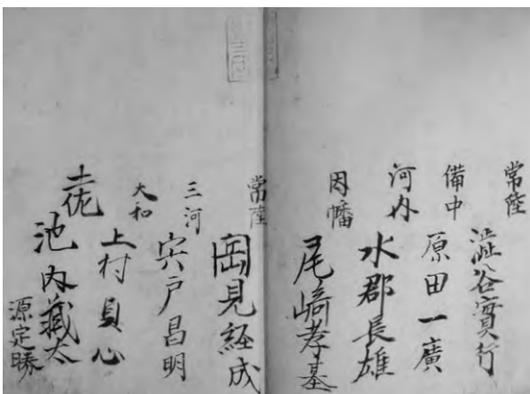
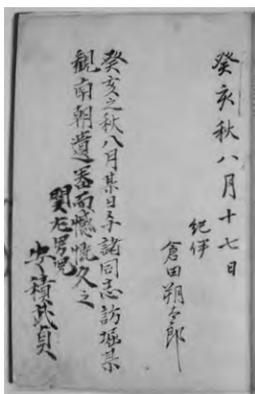
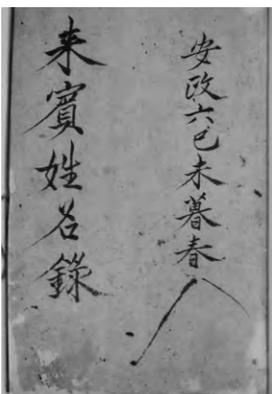
方広寺には土佐藩が道場として借りていたところがあり、そこに武器などを隠していたようです。おそらく、方広寺全体の中の一部ということである文献には大仏に集まった、ある文献には方広寺に集まったと書かれていたりしますので、私たちが現在お詣りしている方広寺ではないことは間違いないと思います。また、そのように話す学者もいらつしやいます。

天誅組の行軍ルートは、皆さんご承知の通りで、京都から淀川、伏見から船に乗りまして淀川を下り、淀川河口から南東の堺港に上陸して富田林、河内長野、そして千早峠を越えて五條に入ってきました。

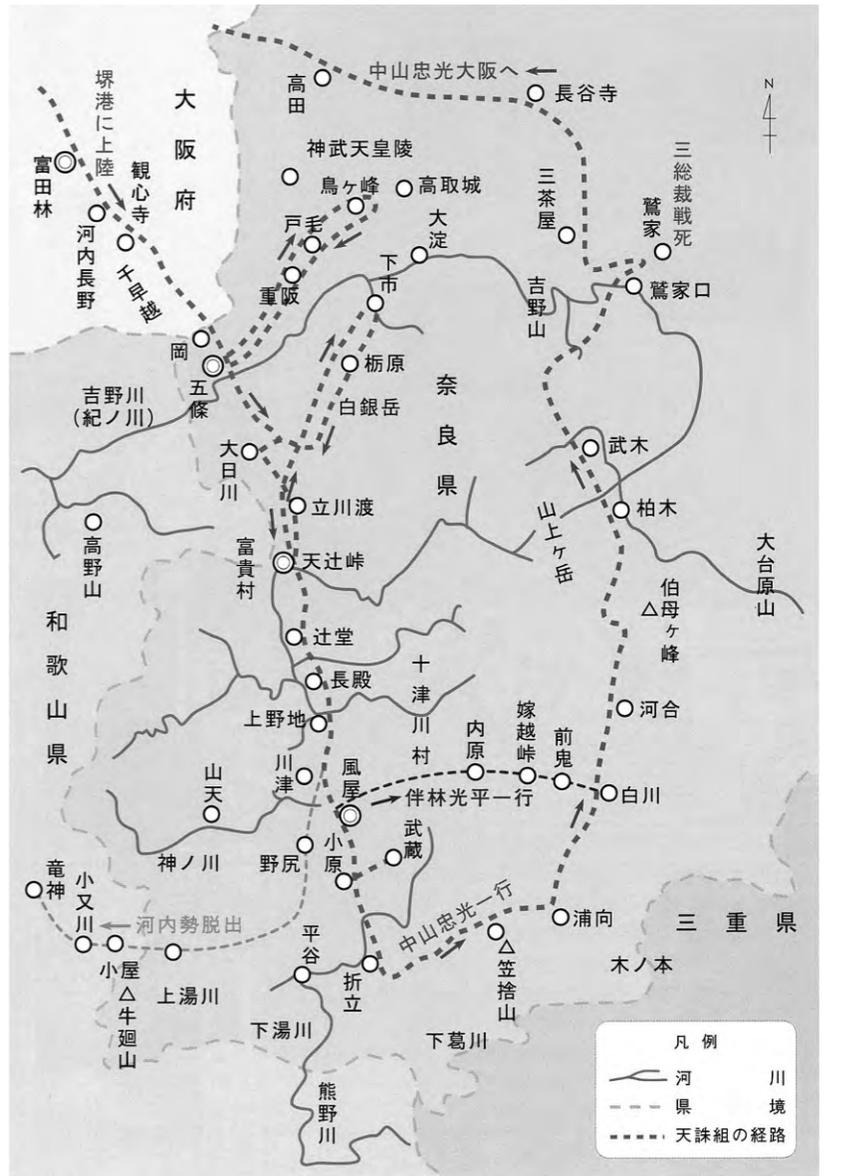
#8

天誅組の変はおおよそ40日続きましたが、最終の東吉野が旧暦の9月24日です。当時の三十石船2艘くらいに分かれて乗っていたんではないかと思われ。そして堺港に上陸し、そして東の富田林の方向に歩を進めました。その富田林の水郡善之祐の屋敷に、中山忠光をはじめ天誅組の志士たちが集まっています。ここでは河内勢も加わって、だいたい80人くらいにふくれあがったということです。半田門吉という久留米の出身の隊士が書いた『大和日記』では、「水郡宅へ八ツ時（午後2時）頃着陣、同所ニテ菊ノ御紋ヲ打タル幟一流同旗一本拵へ、夜半過ニ大將軍（中山忠光）御馬上、陣大鼓ニテ出陣ス」とあります。河内長野に観心寺というお寺があります。そこは楠木正成が幼少の頃学問をしたといわれており、そこには楠木正成の首塚が

またその当時、賀名生皇居に立ち寄った天誅組の人たちの署名録が残っています。安積五郎は江戸の出身です。それから渋谷實行（渋谷伊与作）、常陸下館。備中原田一廣と書いてありますが、原田亀太郎。河内の水郡長雄。長義の父親で河内勢のリーダーです。それから鳥取の尾崎孝基、水戸の岡見留次郎、それから三河の宍戸昌明とあるのは先ほど紹介した宍戸弥四郎のことです。大和の上村貞心、この人も東吉野で戦死した植村定七です。それから先ほどの池内蔵太などの名前が出てきています。その他にも何人かの署名があります。「癸亥秋八月某日与諸同志訪堀某 観南朝遺器而感慨久之癸亥秋」、8月某日に南朝の遺品や器などを見せてもらって感激したというようなことが書いてあります。



来賓姓名録 特定非営利活動法人維新の魁・天誅組所蔵



天誅組の足取り 五條市教育委員会編「天誅組の変」所収
 京都(1863. 8. 14)⇒堺⇒河内⇒五條⇒十津川⇒高取⇒十津川
 ⇒北山⇒川上⇒東吉野(9. 24)⇒(安堵)

十津川郷士が天辻に集まり、それに力を得て高取城を攻めるということになるわけです。ところが、その中には慎重にものを考える人がいました。十津川郷林村の庄屋をしていた玉堀為之進という人は「これは本当に天皇が言い出したことなのか、どうかよく確かめてほしい」ということを言って、河内の上田主殿とともに、反逆者の扱いを受けて斬首されました。その時に玉堀がよんだ歌が

国のため仇なす心なきものを
 仇となりしは恨みなりける

で、これは為之進の孫が調べたものです。十津川村は明治22年の大水害で天誅組に関する資料がほとんどなくなってしまうので、その孫がいろいろ調べて祖父為之進のことについて「玉堀為之進之傳」を書き残しています。現在は十津川村歴史資料館に所蔵されています。

#10
 天の辻峠には天誅組史跡という碑と鶴谷治兵衛の顕彰碑があります。天の辻本陣は豪商の鶴屋治兵衛邸に置いていました。天の辻峠は、ちょうど五條と十津川の物資の中継地だそうです。天誅組は、ここから高野山や十津川郷へ援軍を頼んだりしました。そして、1000人とも1200人ともいわれる

昔の道というのは、だいたい道幅が150センチメートルくらいです。その道を1000人以上の十津川郷士と天誅組が不眠不休で再び五條へ下りて行って、高取城を攻めるといことになるわけです。これが8月26日のこと

です。十津川郷士と天誅組の志士たちが高取城を攻めますが、すぐに制圧されます。高取城は廃城になって今は石垣だけです。岡山県の備中松山城、岐阜県の岩村城と並び、日本三大山城といわれています。その高取城攻めで、味方の鉄砲に撃たれたのが吉村寅太郎で、それを最初に手当したのが榎本住という女性の医者です。現在も御所市に榎本病院として続いています。

ということで、都会で暮らしておられる先生方にとっては山また山の十津川村です。この土地に残っている歌があるそうです。これは司馬遼太郎の『街道をゆく』の中に出ていたので紹介させていただきます。

とんと十津川 御赦免どころ 年貢いらすの つくりどり

十津川村は代々勤王郷といわれており、常に租税を免除されてきたところだそうです。で、これは十津川村の意思だと思えますが、幕末になって朝廷に対して昔のような十津川の地位を得たいということをお願いをするわけです。中川宮からいただいた沙汰書が残っております。

「大和十津川郷士、従往古奉重朝廷誠忠之輩不少由、方今不容易時勢候間、其遺志相続可励忠勤候事」

十津川郷士は昔から往古より朝廷を重んじ奉り誠忠の輩少なからず、今日容易ならぬときだから、その志を続けて忠勤に励みなさい、ということが書いてあります。十津川村は朝廷に関わる地位を得て、北白川辺りに十津川屋敷という屋敷を借り、十津川兵が御所警護に行っています。その時に行ったのは200人くらいでした。ただ、朝廷が資金を援助してくれるはずがありませんので、自前で行っていたようです。

十津川村は世界遺産になっています。私も奥駈道へ一度行っておきたいと思っていました。未だ行っておりません。その当時の十津川郷は、各村

総代の合議制で運営されていました。上平主税といふ医者も十津川郷をリーダーでした。明治2年(1869)横井小楠要殺事件の首謀者と見なされ伊豆新島に終身流刑となりました。彼は子供たちに勉強を教えたり、種痘を本土から取り寄せて伝染病を予防したりして、その後大赦で十津川へ戻って玉置神社の初代宮司となりました。元々玉置神社はお寺でしたが、十津川村は廃仏毀釈で全部寺をなくしました。そのときに、玉置神社も神社に変わりました。68歳で亡くなるまで、この神社を守り続けたということです。この神社は奥駈の靡、修行場の一つです。当時の十津川郷士が御所警護に使っていた服装、それから十津川の郷旗、十津川村の山道に行く時に使った山駕籠が十津川村歴史資料館に展示されています。こうして、天誅組が転々と本陣を移していたのが十津川村なのです。

#11

8月28日から29日にかけて、十津川村北部の長殿というところに入り、9月20日に下北山村の方へ出て行くまで20日以上あります。その間、大塔や西吉野へ下って行って、また逃げ戻ったりして、十津川村内を転々としています。

9月5日に朝廷(中川宮)から十津川村に天誅組追討の沙汰書が下されました。

「去十七日於和州五条村乱暴之浪士追討之儀、武家江被仰付候得共、余党十津川郷立入候由相聞候、追々時日相移候而者、国家之大害可及候、十津川郷往古以来、勤王之志情相励尽力、早々追討可有之御沙汰候事」

8月17日に大和の五條村で乱暴した浪士たちがいる、武家どもにそれを

やっつけるように言ったが、十津川郷士も入っていると聞き、このまま放っておくと国の大害に及ぶ、十津川郷は昔から勤王郷なので早々討ち取るべし。ということで、この沙汰書が9月5日に発せられてから10日後、京都にいた十津川郷士により十津川村にもたらされるわけです。

この沙汰書は、写しも含めて3つのルートで、「和歌山高野山ルート」、それから五條からの「西熊野街道ルート」、それから東熊野街道、「川上村北山ルート」十津川村を目指しました。その沙汰書の北山ルートの方がなんと十津川村に入って、いよいよ十津川郷が天誅組から離脱することになりました。

9月16日、天誅組が十津川を退去するというところで、伴林光平と北畠治房が先遣として十津川村の笹の滝を越えて北山郷の方へ出発しました。その後、中山忠光たち本隊は別のルートで十津川村をあとにしています。で、伴林光平たちは1341メートルの嫁越峠を越えて東の上北山村にやってきました。私も若いころ上北山村から嫁越峠へ行きましたが、道がなくて十津川へ下りられなくて、結局上北山村へ引き返しました。光平は、下痢や脚気になり非常に辛かったということを歌にして、奈良奉行所で書いた『南山踏雲録』の中に書き残しています。

明日越えむ娘が峠やいかならむ 先ずくるほしき嫁越の山

山風にたぐふ眞神の聲ききて 寝られむものか谷の萱原

「眞神」というのはオオカミのことで、この当時オオカミが実際に吉野山地にいたということがよくわかる歌です。1905年に東吉野村で捕らえられたニホンオオカミが日本で最後といわれていますが、(わずか40年ほど前の)1863年頃にオオカミがいたという証拠です。

信丸殿

魂は高天原に在りて金石不碎

又この世に生まれて再会せむ……

「伴林光平の研究」(鈴木純孝、講談社出版サービスセンター、2001年)

#12

三枝翁。当時は青木精一郎と名乗った大和郡山市椎木町にある浄蓮寺のお坊さんです。最後まで尊王攘夷を貫いた人です。明治元年(1868)、イギリス公使パークスが天皇に謁見するために知恩院から御所に向かう道中、朱雀操と2人で一行の行列を襲ったという事件(パークス事件)を起こしました。

9月22日、天誅組から別れた河内勢は、龍神村の紀州藩陣所に自首します。紀州藩に捕らえられて殺されても自分たちの思いを世間に明らかにしようというので、この陣所に自首したのです。ここで捕らえられて和歌山に送られ、さらに京都に送られて翌年、禁門の変の最中に処刑されました。これは水郡善之祐の辞世の歌です。

皇国のためにぞつくすまごころは 神やしるらん知る人ぞ知る

#13

天誅組本隊の動向ですが、十津川を出て9月19日、笠捨山(標高1352メートル)で野宿します。登山口から山頂まで凡そ3里ですので約12キロ

それから、十津川郷の責任を一身に背負って野崎主計という庄屋が自刃をしましたが、その辞世の歌です。

討つ人も討たるゝ人も心せよ 同じ御國の御民なりせば

斑鳩の方にも尊皇攘夷思想をもった集団がありました。今の安堵町で、リーダーが今村文吾という人物です。中宮寺の侍医をしていて、現在の文吾の生家は安堵町歴史民俗資料館になっています。そこで伴林光平も中宮寺の侍講として和歌などを教えたりしていました。この晩翠堂という私塾は、文吾たちが伴林光平らも含めて尊王攘夷の活動をしていたといわれています。今村文吾は高齢のために天誅組に従軍できず、そのまま斑鳩にいたのですが、伴林光平は、東吉野村、初瀬の観音、三輪、天理市の庵治あたりを越えて、大和郡山の額田部にある額安寺に立ち寄り、斑鳩の中宮寺の近くにある駒塚の我が家に戻りました。しかし、そこにいるはずの妻や子供たちはいませんでした。取り締まりや探索が厳しくて子供に会えなかったため、やむなく手紙をしたため今村邸の高塀越しに投げ入れて立ち去りました。

……金武拾刃にたらねども、尊大人へ御まかせ申上候。信丸、しう二人のなりゆく様にまかせ、御与へ下されたく御願申上候。せめてもの事に、今一目と存じ候へどもかいなし……

八丘(光平)

松斎大人

男 信丸に

父ならぬ父を父ともたのみつつ

有りけるものをあはれ我子や

メートル。そこから下って、下北山村の浦向に行きます。こんな山深いところを本隊が越えていくわけです。そして9月20日に下北山村の正法寺に泊まっています。それから、上北山村の白川というところにある林泉寺に2日泊まっています。いよいよ出発しようというときに、村の人間が誰もいないということで武器を集めて寺とともに燃やしてしまいました。それから川上村伯母谷にやってきました。ここで高熱で行軍不能になった久留米の小川佐吉と五條の医師乾十郎が、「天誅窟」という洞窟で6日とも9日とも云われる期間、潜伏していました。その間、この地区の人たちが食べ物や運んだりして、中山様御家来入用覚え」という日記のようなものが伯母谷地区に残っています。

9月24日、東吉野村のすぐ隣の武木というところで、庄屋大西吉右衛門宅ほか数軒に分かれて最後のお昼ご飯を食べました。大西家はもう建て替えられて残っていませんが、中山忠光が食事をとった大西家に、藤本鉄石が厚意に感謝して短冊に3首の歌を残しています。

大王の御たゝむきさすあむ置きて あきつはなきか秋のみ空に

八咫からす導けよかし大君の 事しいそしむ御軍のため

雲をふみ岩をさくみしものふの よろひの袖に紅葉かつちる

吉村寅太郎は、8月26日に高取城を攻めたとき味方の銃弾が太ももにあたり、駕籠に担がれて東吉野まで運ばれて来ました。そのとき寅太郎が「辛抱せい、辛抱せい、辛抱をしたら世の中が変わる、それを樂しめ」と駕籠担ぎの人たちを励ましたといわれています。鷲家口の手前まで下りてきたところで、追討軍の彦根勢が川の両側で待ち受けていました。

9月24日、鷲家口での激戦で6人の天誅組の隊士が殺され、彦根藩士も



天誅義士記念碑（東吉野村）



吉村寅太郎の遺品 血染めの肌襦袢
御所市教育委員会蔵

2人戦死しています。伊豆尾では刈谷の松本奎堂が戦死した場所に記念碑（天誅組総裁松本奎堂先生戦死之地）が建てられています。この記念碑は昭和17年、刈谷町の町長が書いて刈谷の方から運ばれてきたものです。

これは奎堂の辞世の歌といわれている歌碑です。

君がためみまかりにきと世の人に 語りつきてよ峯の松風

藤本鉄石は、紀州藩が陣取っていた鷲家の旅館へ福浦元吉という淡路の庄屋と2人で突撃をかけて、戦死をしました。

9月27日、吉村寅太郎が戦死しますが、その近くにある大岩「残念岩」のすそに埋められ、現在は記念碑（吉村寅太郎君原塚）が建てられています。また、寅太郎の遺品「血染めの肌襦袢」は御所市教育委員会に保存されて

います。松本奎堂の兜は刈谷市の歴史博物館に保存されています。他の遺品類については、さまざまなところで所蔵・保管されています。

みなさんにお伝えしておきたいと思うことは、十津川村にある文武館についてです。「十津川文武館」は、元治元年（1864）に孝明天皇の命を受けた隠岐島出身の儒官中沼了三が十津川村に入り、十津川郷士が文武を学ぶために創立した郷校です。この文武館が現在の十津川高校です。今も十津川高校と隠岐島前高校が交流をずっと続けていると十津川高校の先生にお聞きしました。

#14

最後になりましたが、尊王攘夷とは何だったのか。

私たちの村は天誅組の終焉の地ということで、155年間、ずっと志士たちをお祀りし続けていますので、高い志を持った人たちであろうと思っていますが、天誅組の考え（志）が、果たして後世のプラスの方向に働いたのかどうかということについて、少しばかり懐疑的に見えています。しかし、王政復古の大号令、これには大いに影響を与えました。それから、大日本帝国憲法には「萬世一系ノ天皇」と言葉が出てきますので、これにも影響したかと思えます。特に、明治新政府の神祇省は、少なくとも尊王攘夷と関わっているのではないのでしょうか。国家神道にも、天誅組は大いに影響を与えたのではないのでしょうか。これらは私の勝手な想像です。

実際に、尊王攘夷から明治になって開国へ変わります。明治政府は、富国強兵、戸籍・学制や税の金納、国民皆兵制など、中央集権国家への道を突き進みます。さらに、日清戦争（1894-1895）、日露戦争（1904-1905）、第一次世界大戦（1914-1918）と、約10年おきに戦争をしています。このことをどうみたらいいのか、ということが今、私の思っているところです。

了



さかもと・もとよし

1944年3月奈良県吉野郡東吉野村生まれ。1966年高知大学教育学部卒業。帰郷後38年間、同村を中心に小中学校教員から中学校長を務めた。定年退職後、幼稚園長を経て、2006年から8年間、同村教育長を務める。NPO法人「維新の魁・天誅組」副会長（事務局：五條市）。著書『草莽ノ記～天誅組始末～』（同村・2003年自費出版）、『東吉野ガイド』（2010年東吉野村）他